
先生、骨が折れました

白の

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先生、骨が折れました

【Nコード】

N4381I

【作者名】

白の

【あらすじ】

生きたかった少年と少女の物語。

クラス替え早々に何を言うのだろうか。何かのアピールだろうか。後ろの彼女が発した言葉はまさに狂っていた。

「先生、骨が折れました」

どよめく教室。それがまともじゃない彼女を更に孤立させていた。「前のやつと一緒に保健室に行ってきます」

とつさに振り返るとすぐそこにそいつはいた。まっすぐな視線が僕に突き刺さる。え、僕？ 少しの間彼女とにらめっこをしていた。「でもね。そ、そんなに痛がってないでしょ？」

狼狽しながら教師は言う。だが彼女には届かないようだ。

「行ってきます」

虫の知らせというやつだろうか。嫌な予感がした。

おどおど席を立つと彼女が腕を掴み、ものすごい力で僕を教室から連れ出した。

「ねえ」

「な、なに？」

彼女は変わらず僕の腕を強く握って。その手は震えていた。

「あなたと私、どっちが死ぬべきだと思う」

思考回路が止まる音がした。やっぱり彼女は狂っていたんだ。

僕はなんて答えればいいのかろう？ ああ、なんで今日に限って朝食を食べるのを忘れたんだろう。朝食を食べていれば……。そうそれはもっと簡単なこと。僕が寝坊なんかしなければよかったんだ。そうすれば彼女の問いに最良の答えを与えられただろうに。

「ねえどっち」

僕は生きたかったんだ。ごめん。それ以上でも以下でもない。だから彼女が僕が突き飛ばした時、僕の体は車線を二つ越えて反対の歩道まで届いた。体も心も生きたかったんだ。

なんでこんな変なこと考えるんだろう？ シルク色の天井を眺め

ながら思う。記憶が交差している。

「あんたみたいなの助けた私がばかだったわ」

「そっか」

すべてを悟った。あのとき僕は助けられた。彼女に。

「まあ、助けたんだからがんばって生きてよね」

一瞬のうちに世界が黒く塗りつぶされる。

——いや違うのかもしれない。その証拠に温かい感触が手に。
手は握られていた。当人はすやすやと眠っている。

「君も生きたかったんだね」

彼女の肘には白い包帯が巻いてあった。

（後書き）

初めて書いた作品です。
宜しければ読んでみて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4381i/>

先生、骨が折れました

2010年10月18日19時16分発行